



豊玉二中だより

令和4年度 第7号
発行日 10月4日(火)
練馬区立豊玉第二中学校
校長 神山 信次郎

和を以って貴しと為す

副校長 木原 賢三

校庭の木々も色づき始め、秋の深まりを感じられる季節となりました。コロナ禍の影響で2年間中止されていた修学旅行が3年ぶりに実施されました。3年生にとっては中学入学後の初めての宿泊学習となり、生徒たちは、歴史的文化遺産・遺跡等に見て、触れて、古代の文化・息吹を感じる修学旅行になったとともに、学校行事として日常と異なる生活環境で見聞を広め、集団生活や公衆道徳について社会体験を通して学ぶことができました。学校では学ぶことができないことを体験できる貴重な機会であり、生徒たちは、様々な体験や経験を通して、新たな学びとして学びの幅を広げていってほしいと願っています。

さて、私は以前、世界最古の木造建築物として世界遺産にもなっている法隆寺を見学した際、南大門の雄大な姿や五重塔の壮さに、1300年の悠久の歴史を実感し、深い感銘を受けました。そして、宮大工の西岡常一さんが著した「木に学べ 法隆寺・薬師寺の美」という本を読み、飛鳥時代の人々のもつ哲学に感動し、改めて法隆寺のすごさを痛感しました。著書の中で、宮大工の口伝として伝えられている、「塔組は、木組み。木組みは、木のくせ組。木のくせ組は、人組。人組は、人の心組み。」という言葉が特に印象に残っています。木にはそれぞれ癖があり、一本一本違います。基礎のしっかりとした塔を建てるためには、木の癖を見抜いてうまく組むことが大切であり、そのためには、木の癖以上に「人の心」をつかんで、しっかりと共同作業ができるようにしておくことが必要であることを伝えています。木も人もそれぞれ個性があり、それをしっかりと理解して個性を活かすことが大切だと教えています。

これからは多様性の時代といわれ、人々の生活習慣やものの考え方、多様な価値観など一人一人の違いを違いとして認め合っていく社会となっていきます。そのような社会において、学校では、多様性を認め合い、相互に人格と個性を尊重し支え合う「誰一人取り残さない」学校づくりを目指していきます。そして、個性を個性として認め、一人一人の持ち味を活かして適材適所の学校づくりを進めていきます。これまでは教師が中心となって学びをすすめ、「みんなで同じことを同じようにできること」が目指されてきました。しかしながら、多様性の社会においては、十分な教育効果を上げることが難しくなっています。これからの社会においては、個に応じた学びを進めるのと同時に、協同して学びを深めていくことが重要になってきます。生徒一人一人の特性に応じ、個々の興味・関心を生かした学びを工夫し、仲間と「チーム」となって学び合いをすすめることが、生徒一人一人の良い点や可能性を生かすことにつながり、多様な考え方が組み合わせり、より良い学びを生み出すことができます。「チームワーク」「和」は、「和を以って貴しと為す」（「十七条憲法」聖徳太子）という、昔からの日本人の良さです。

今年度、60周年を迎える豊二中ですが、本校で学び、生活した生徒だけでなく、これまで豊二中を支えてくださった地域の皆様のすべての方と共に「チーム豊二」として豊二中の心を組み、周年行事を成功させたいと考えています。そして、今後、70周年、100周年に向けて地域の皆様とともに、さらにより良い学校づくりのために教職員一同、力を尽くしていきます。

